

83

● 発行者 稲門建築学会会長・村松映一
 ● 編集者 稲門建築学会広報委員会
 ● 発行所 稲門建築学会
 〒一六九・八五五五 東京都新宿区大久保三・四・一
 早稲田大学理工学部5F-5-02-01
 電話・ファックス 〇三・三二〇八・〇六四〇
 ホームページ 〓 http://www.all-waseda.com/rkogakkai/raunon_arch/
 電子メール 〓 toumonji@poppy.ocn.ne.jp
 制作 〓 都市建築編集研究所
 DESIGN: KAKEI GRAPHICS
 © 稲門建築学会

- 巻頭言 世田谷美術館での展覧会を終えて……石山修武
- 日本建築学会賞受賞所感……小松幸夫
- 副都心線開通 西早稲田駅開業と「早稲田の森」構想……後藤春彦
- 座談会 異文化を超えて……Abel Erazo・山中恵 郝璐 司会・徳家統
- 特集 今と昔の学生生活……門田新平・三村良輔・上田真路
- 第8回稲門建築学会「フューチャー公開懇談会特別講演会」設備家の生き様を知れ。／井上宇市 報告
- 2008年早稲田建築学会同クラス会速報……小笠原昌宏

November
2008

早稲田建築ニュース

Waseda Architectural News of

巻頭 言

石山修武 〔早稲田大学教授〕
〔苗S41・院S43〕

「建築がみる夢―石山修武と12の物語―」と題した展覧会を6月28日から8月17日まで世田谷美術館で開催し、終了しました。1万6千人近くの来場者がありました。稲門建築会にもメルマガ通信他で会友に知らせていただき、大変力をいただきました。御礼申し上げます。会場で実に多くの会友の皆さんとお目にかかることができて幸いでした。

世田谷村と呼んでいる自宅と、美術館が同じ世田谷区で距離も近く、夏休みと重複する期間でもあったので、大半の日々を会場で過ごしました。石山研究室の一部を世田谷美術館内に移動して、1ヵ月半ほどの美術館暮らしを、生まれて初めて体験しました。また、会期中、連続21回の講義を会場で開催しました。この講義にも千名ほどの受講者がありました。多くの高校

世田谷美術館での展覧会を終えて

生諸君にも話を聞いてもらいました。この講義録は2009年春に出版される予定です。

会友諸兄姉も知るように、今、建築は水河期にあると言つて過言ではありません。大河としての時代の歴史に抗するのは無意味ですが、それだからこそ、特に若い世代、次の世代に建築への夢を託していかなばならぬのも、また、時代故の課題でありましょう。



「建築がみる夢」というテーマに記したのはそんなことでもありました。

建築が持つ潜在力には底知れぬものがあります。その可能性を展覧会を介して広く社会に訴えかけたかったのです。そして、建築学科教室も、稲門建築会も、軸足は揺らさずに、しかしながら大胆な変化進展にチャレンジする今が、チャンスです。その一つのヴィジョンらしきものを、私案を、展覧会で示そうとしました。それは情報、映像世界と建築世界との融合分野への進出という考え方でした。今、それを具体化しようとして懸命努力しています。稲門建築会の力が必要になります。展覧会はその予告編でした。

学会賞受賞所感



早稲田大学にお世話になってはや10年が経ちましたが、このたび建物の寿命推計に関する研究で日本建築学会賞をいただき、皆様のお蔭と感謝しております。

この研究を始めたきっかけは昭和48年の第一次石油ショックにさかのぼります。当時はまだ学生でしたが何となく高度成長期の終焉を感じて、これからはものを大事にしていく時代になるのかなと思いました。ちょうどその頃に建設省の総合プロジェクトというものが始まり、大学院の指導教授から耐久性をテーマにした調査を手伝う機会を与えられました。いろいろ調査を重ねて博士論文をまとめる段になり、耐久性という言葉について考えましたが、「壊れないこと」より「使える

小松幸夫(早稲田大学教授/教H10)

こと」のほうが重要と思いい、耐用性という言葉を使うようにしました。単純に長持ちだけを追求すると、かえってオーバースペックになる危険があり、まずは実際にどのくらいもたせるべきかを考えなくては……などと思いついたところ、恩師の内田祥哉先生が「なぜ日本の建物の寿命がわからないのだろう」とつぶやかれたことがありました。この言葉がきっかけで、まずは建物の寿命実態を調べてみようと思いついたことが研究の発端でした。

当時、耐久性についての研究指導をしていたいた千葉工業大学の宇野英隆先生(早稲田の数学科のご卒業で大学院は東大の建築)から統計学や信頼性工学の存在を教えてくださいいただき、また人間の平均余命の推計方法なども勉強しました。ところで建築学会には固定資産評価小委員会というものがあ、小生は大学院生の頃から末席に加えていただいております。固定資産税とは戦後創設さ

れた地方税ですが、そのうちの建築家屋に関することについては建築学会が税制発足の当初から国に助言をしています。各市町村には税の徴収のために固定資産台帳が整備されていますが、それをうまく利用すると建物の寿命が推計できることに思い至りました。この時はまさに「やった！」という感じでした。これはちょうど新潟大学にいた頃のことですが、その後、横浜国立大学、さらに早稲田へと移りながら、思い出したように調査をしては論文を書いてきました。その間に日本の経済事情もいろいろ変化し、また建物を取り巻く環境も大きく変わりました。短いといわれたけれど建物の寿命も長くなる傾向にあり、また以前は見向きもされなかった建物の維持管理や補修・改修にも注目が集まるようになりました。これからもやるべきことはいくらでもあるというのが今の実感です。

「OB」による仕事紹介」開催

学生・OB双方から毎年好評をいただいている「OB」による仕事紹介」を12月13日(土)に開催します。業種別：企業別の仕事紹介と懇親会の3部構成で、150名近くの学生とOBの方々の活発な交流が行われる予定です。学生諸君は奮ってご参加下さい。

日時 12月13日(土)13:00～19:00

場所 第1部 57号館201教室
第2部 55号館N棟大会議室 第1会議室
第3部 55号館N棟大会議室

2009年稲門建築会新年会のご案内

2008年も余すところ1カ月余となりました。2007年度は会費納入も2,500口を超え、また今年は職域も10%増えて、稲門建築会発展の兆しが見えてきました。

さて稲門建築会では、恒例の新年会を1月28日(水)に企画しています。2009年五年の新年を皆さんでお祝いし、大いに飲み、語りつてはありませんか。なお、当日は新年会の前に第2回職域幹事会を予定しており、にぎやかな新年会になること間違いな

しです。皆さん、奮ってご参加下さい。スケジュールは左記のとおりです。

日時：2009年1月28日(水)
●職域幹事会 17:30～18:30
(55号館N棟大会議室)
●新年会 18:30～20:00
(55号館N棟第1会議室/会費3,000円)
大高一博(理事・会員委員会委員長/苗S51・院S53/日建設計)

副都心線開通・西早稲田駅開業と「早稲田の森」構想

後藤春彦(早稲田大学教授/苗S55・院S57・博S62)

今年、早稲田大学理工学部は学部創立100周年を迎えた。これに合わせて一昨年、「基幹「創造」先進」を冠した3つの理工学部にも再編されたが、この機に大久保キャンパスのリニューアルも着々と進められている。

特に、1967年の現在地への全面移転以来、理工学部は高田馬場駅、新大久保駅、早稲田駅の3駅からほぼ等分の距離にあり、交通利便性が芳しくないことがしばしば指摘されてきた。40余年の歳月を経て、ついにその夢が叶い、本年6月に明治通りの地下を走る東京メトロ副都心線が開通し、大久保キャンパスの地下1階トライアリアルレベルに直結する西早稲田駅が開業した。

東京都心の最後の地下鉄といわれる副都心線への期待は非常に高く、多くの学生や教職員の新しい足となっており、来訪者にもたいへん好評である。現在、副都心線は東武東上線と西武池袋線に乗り入れているが、今後、東急東横線にも乗り入れる予定で、より一層の利便性の向上が期待されている。大久保キャンパス内の動線も変化し、地下鉄駅とキャンパスの結節点をリニューアルすることにも、中庭や塀などの緑化・修景を進め、開かれたキャンパスをめざしている。これに合わせて新宿区も隣接する区道の高規格改修を進めるなど、好影響が連鎖的にひろがっている。

副都心線の開通に伴い、大久保キャンパス周辺の

公有地などの開発ポテンシャルも高まっている。特に、大久保キャンパスの南に隣接する区立中学校は人口減少の影響を受け、統廃合により2年後に閉校となり、その跡地に区立中央図書館が建設されること、新宿区総合計画に位置づけられている。そのほか、国家公務員住宅の払い下げや都立の諸施設の移転なども検討されており、西早稲田駅の周辺は今後大きく変化することが予想される。

これらを取り組むかたちで、「大学が核となるまちづくりの展開」をめざして都市再生モデル調査の選定を受け、東京都都市整備局、新宿区、都市機構、早稲田大学からなる「新宿地域・活力のある緑の大学都市づくり研究会」を組織し、2006年に私の研究室が事務局となり、「早稲田の森の提案」を公表している。

この構想の骨子はキャンパス周辺の国、都、区などの大規模土地所有者および利用者との協働により、「門」と塀を無くす、「みどりを増やす」「歩きたくなるまちにする」というわかりやすい基本理念のもと、諸機能をつなげることを「森」になぞらえたもので、大規模敷地の更新や都市公園の再整備に合わせた一体的な都市の森の中に、大学の教育研究機能に加えて、国際的な都心居住機能、医療福祉機能、にぎわい機能、産業育成機能を展開することをめざすものである。

現在、早稲田大学と新宿区は「協力連携に関する

基本協定(2003年)を結び、まちづくりのパートナーシップを構築しており、大久保キャンパスを含む西早稲田駅の周辺で地区計画策定の検討も始めている。

副都心線開通、西早稲田駅開業を機に、機能的にも空間的にも、これまで以上に開かれた教育研究環境の構築をめざしたいと念願している。

副都心線西早稲田駅断面図
提供 新宿地域活力ある緑の大学都市づくり研究会



チリ、パラグアイ、中国から日本へ

徳家 今日、日本に留学され、異文化の中で建築の研究をされている皆さんに、いろいろとお話をうかがいたいと思います。まず、自己紹介をお願いします。

エラン 日本に来て5年、石山研究室博士課程3年に所属しています。来年9月修了予定です。チリのサンディエゴ出身です。

山中 パラグアイから来ました。渡辺研究室で環境心理の勉強をしています。両親が日本人で、日系人二世です。現地のアンソニオン国立大学で建築学部を卒業しました。

郝 カクと申します。中国のハルビンから来ました。早稲田で建築を4年間学び、現在は、長谷見研究室の修士1年です。

徳家 皆さんは、そもそもどうして自分のいる国から外に出てみようと思ったのですか？ 何を研究しようと思って、自国ではない環境を選ばれたのですか？

エラン 僕は、両親が祖国チリを一時的に離れ居住していたキューバで生まれ、その後14年間キューバで育ちました。キューバとチリで過ごした時間は半々くらいです。



大学を卒業したとき、自分はこの国にずっといるわけがない、と考えていました。なぜなら、ずっとチリのような一番南のローカルな場所にいるだけでは、自分のことがわかりにくいし、動いている世界もわかりにくい、と感じたからです。

常に動きの激しい世界の中で研究するには、やはりアジアのほうが可能性があるのではないかと考え、日本を選びました。ヨーロッパは20世紀で終わっているから、そこに行ってもしょうがない。アメリカからは離れたかった。日本は建築

【座談会】

異文化を超えて

海外からの留学生、大いに語る

遠く祖国を離れ、稲門でともに研鑽に励む海外からの留学生は少なくありません。彼らはなぜ、日本そして早稲田を選んだのか。
ニホンは、セカイはどのように映り、そしてどこへ向かおうとしているのか。
グローバルな、自由な視線で、建築を熱く模索し続ける皆さんに、大いに語っていただきました。

- 出席者…… Abel Erazo (アベル・エラン / 1975年生まれ / 院H18 / 博士3年 / 石山研究室)
- 山中 恵 (1981年生まれ / 研究員 / 渡辺研究室)
- 郝 璐 (カク・ロ / 1983年生まれ / 苗H20 / 修士1年 / 長谷見研究室)
- 徳家 統 (広報委員 / 苗H1 / 院H5 / 鹿島建設)
- 司会……

のレベルは高いし、イデオロギーは強くないし、速いし、いいのではないかと思ったのです。

山中 私は、パラグアイでの6年間の建築学部卒業後、アルゼンチンの建設会社に入社しました。1年目はアルゼンチンの本社、2年目はパラグアイの支社で、仕事をしました。その後、仕事にも慣れてきて、新しいことを吸収したい、別の世界



を見てみたいと考えました。そんなとき、JICAの研修生募集を知り、留学を考えました。私にとって日本は、両親が日本人ということもあり、小さい時から親しみのある国でもありました。文化に関してそうです。パラグアイ在住の日本人は、パラグアイには昔の日本が残っていると言いますが、私自身は、戦後経済成長を経て、バブル期を経た現実の日本は知りません。

大学で、日本の建築のことも学びましたが、スライドで見ただけだったので、実際に体験してみたいなと思いました。
徳家 郝さんは、どうして日本を選ばれたのでしょうか？

郝 現在、中国は経済成長していますが、10〜20年前は、普通の家庭では留学をするなんて考えられませんでした。今はそれができるようになり、留学がブームになっている感じがします。でも、日本人のように海外旅行するということはそんなに簡単なことではありません。経済的にも問題があるし、ビザの問題もありますから、外を見てみよう



と思ったら、留学は一番の選択肢なのです。皆さんも知っているように、中国は一人っ子政策を行っていて、私も当然一人っ子なのですが、高校卒業までは、両親から離れることも、一人どこかに行くことも不安を感じていたほどでした。しかし、外を見てみたい気持ちがいかに大きくなり、中国から一番近く、以前から叔母が住んでいた日本に来ることを選びました。1年半の間、日本語を学びながら、それまで叔母を通じて小さい頃から聞いていた、日本は地震が多いけれど建物はあまり倒壊しない、というその技術に関心を持ち、建築を学びたいと思うようになりました。

徳家 中国を出るときは建築を研究するかどうかも決めていなかったのですか？

郝 決めていませんでした。その後早稲田に入学し、構造から、環境、防災、安全性へと関心が移り、長谷見研究室に入りました。中国はまだまだ発展途上で余裕が感じられません。今、地下鉄をつくらうと思っていますが、人の安全が第一に考えられていないと思います。現在、私が研究していることがすぐに中国で使えるかどうかはわかりませんが、今後、防災、安全性といった視点はすごく大事な課題になると思います。

徳家 山中さんは、実際に今の日本を見て、どういう研究をやろうと考えているのですか？

山中 簡単に言えば、「住めば都のプロセス」、環境変化とストレスの研究というもので、異文化の環境に行った時に、人はどういうふうになるのかを認識し、ファーストインプレッションは時間とともにどのように変わっていくか、その数学的モデルをつくるのができないかと考えています。

最初は日本の狭小住宅、狭い空間をどううまく使って設計しているか、という設計手法を勉強するのが目的でした。でも、渡辺研はもっとサイエントフィックな研究が主で、設計は研究とは別にコンペとか自分でやっています。

研究室の中ではいろいろ吸収できることがありますが。たとえば、空間の中で人体がどういった生理的反応を示すかというような研究手法は、パラグアイの建築学部ではほとんど研究されていません。日本に来てそういう研究の機会が与えられて、他の人の研究や実験を見て、自分でも一つ研

究の成果を残してみたいと思っています。具体的には、JICAの協力を得て、外国から来て1〜3カ月の人にアンケート調査をしています。

ヨーロッパではなく、アメリカでもない可能性とは？

徳家 エラソンさんはどうして石山研究室を選んだのですか？

エラソン チリの自分の大学から探した時、石山研究室のホームページが英語で書かれているのを読んで、考え方に興味があると感じたからです。グローバルゼーションに対して批判的で、そういう珍しい所だからこの研究室に参加したら面白い勉強になると考えました。

徳家 石山研究室は予想通りの研究環境でしたか？

エラソン はい、選んでよかった、自分に合っていると思います。石山先生が留学生に来てほしい理由は、国際的な雰囲気が必要だと考えていて、日本人のためにも文化交流はとても大事だからだと思います。グローバルゼーションというのは全部同じになることで、アイデンティティとか、いろいろ違うもの、個が見えない。でも本当は、「見えない所」「違い」「個」が一番大事だと僕は感じています。

今はチリで来年7月に行われる展覧会の設計をやっています。2010年は南米の国々がスペインから独立して200年のアニバーサリーとなるとても大切な年なのです。そうした歴史・時間の中で、スペイン、つまりヨーロッパから独立して新しい世紀に入ってこれからどこへ行くのか？アジア太平洋にはいろんな国があります。ヨーロッパではなく、アメリカでもなく、アジア太平洋の新しい可能性として、中国もそうです。チリとかラテンアメリカはどうやって動くのか。今、そういう研究をしています。

徳家 エラソンさんの目から見て、日本の都市や建築、風景の中で、どういうところが気に入っていますか？

エラソン 僕が一番興味があるのは、日本の歴史です。日本の歴史はとても長くて、外からの影響を受けて、江戸時代、明治時代にだんだん外界とつながっていく、そういうコンタクトがあつて、変わっていく。よくチリの人から言われるのは、僕が今いる東京は、未来。チリから見ると20年後くらいの世界です。東京には電子機器とかいろんな音とか、そうしたイメージが一番強い。外に出たらすぐにいろんな刺激があり、そしていつも動いているゲームのようです。そういう場所は、世界の中でもすごく珍しいというかユニーク。それが一番特徴的だと思います。中国も行ったことあるけれど、全然違う。

徳家 私は日本の都会ではなくて、一番好きな風景は日本の田舎の感じですか？

徳家 それはどうですか？

徳家 心が癒される感じがします。(一同、笑)

最初は一番の憧れは東京のような都会そのものだったのですが、6年間生活してきて、常に忙しいという感じがすごく強くて、京都とか奈良に行くくと、静かな空間に癒されます。

中国の田舎は、まだまだ整備されていないところが多くあるし、道など生活に必要な最低限

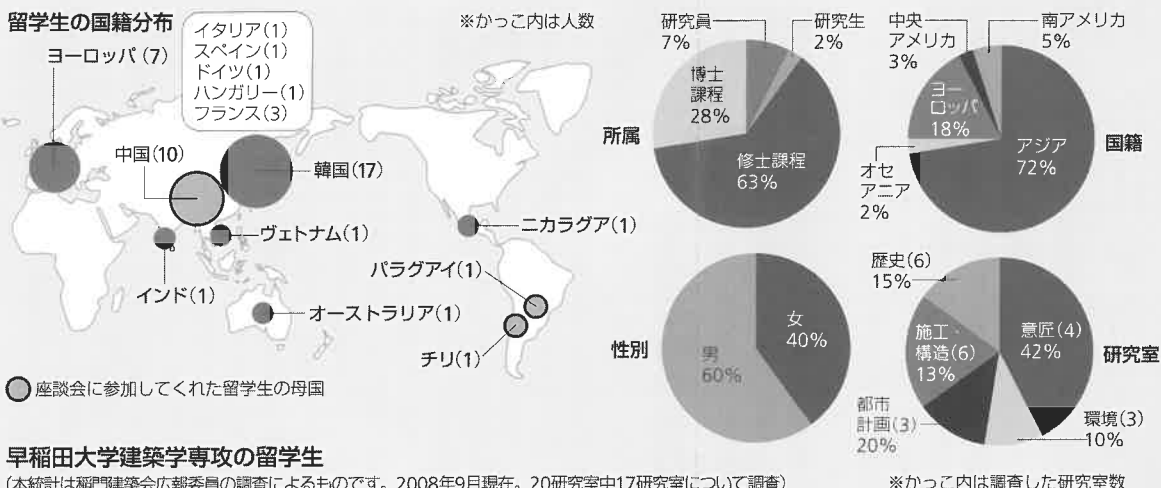
のインフラが整備されていない、そのあたりは日本と違います。日本はどこにいてもそういう基盤はちゃんとつくってあります。

徳家 山中さんは、日本の国籍を持ち、日本らしさを自分の中に半分持っているながら、半分はパラグアイの精神を持っているのだらうと思うのですが。

山中 パラグアイには3国戦争というのがありまして、戦争の前はパラグアイが一番南米で力があった国なのですが、アルゼンチン、ブラジル、ボリビアとか大国に負けてしまつて、領土をたくさん取られたんですね。その後、経済的にもまだ立ち直れない状態で、南米の中でも発展途上国なのです。街の風景は、首都は都市の風景なのですが、スケールは日本のたとえば新宿や渋谷とは全然違いますし、首都とか3大都市と呼ばれているところ以外は本当に山がない風景で、全部平原なんです。緑が多く、森林伐採が南米で一番と言われているけれども、風景はすごくのどかな感じがします。日本に来て、都市を見ても非常に圧迫感を感じます。特に夜、研究室で遅くまで研究して、宿舍のある「みなとみらい駅」に着いたとき、ランドマークタワーや周りのビル群を見るとすごく怖く感じます。何かあつたら押しつぶされそうなの……。

徳家 それは自分の中で、日本の都市の風景に抵抗があつたりするからですか？

山中 抵抗がありますね。田園風景も、向こうに



早稲田大学建築学専攻の留学生

(本統計は専門建築会広報委員の調査によるものです。2008年9月現在。20研究室中17研究室について調査)

は山というものが無いので、埼玉とか栃木、群馬のような、田舎とまではいかないけれど、そういう所をドライブしたとき、夕方になると霧がかかってくるのを見て、山の風景から逃げ出したような気になりました。やっぱりギャップを感じるんですね。昼間はすごく落ち着いてのどかでも、夕方になるとさみしい感じになって。私の原風景とはちよつと違つたのかも知れない。

異文化に触れ合うことで自分の足りないところが見えてくる

徳家 皆さんのお話をうかがっていると、日本における体験の中での、自分自身の中に刻まれているこれまでに過ごしてきた場所の時間軸、歴史性やローカルティとの対峙がよく伝わってきます。

エラソン 東京はチリから見れば未来に居るようなもので、僕はそこに5年住んで未来に慣れてしまつたので、戻るのは結構大変だと思っています。チリは静かすぎるし街に人があまりいないから(笑)、トキョーシックになると思う。

アジャ太平洋圏に興味があり、日本以外を見てから帰りたいと思います。限られた時間内で実務の経験も積みたいし、そういうステップを踏み、40歳までにはチリに帰り、この経験を後輩たちに伝えたいと思います。

徳家 中国は防災面ではまだまだ発展途上ですから、私が今やっている研究にはすごく使命感を感じています。ただ、まだ実務経験がないので、しばらくは日本で実務経験を積みたいと思います。そして、できれば日本で仕事をしながら、中国と関係するプロジェクトをやりたいと考えています。

山中 パラグアイでの仕事は自分にとっていい経験でしたが、もっと知識を積みたくまりました。建設現場はまとまった時間が取れないため、この1年間の留学はいい機会になっています。

渡辺研究室での研究を活かし、大学院で設計の研究を継続して、可能なら滞在を延ばしてきちんと課程を修了させたいと思っていますが、それが無理ならアルゼンチンの大学院に行ってみたいと思います。

徳家 最後に、自分の国の後輩へ一言をお願いします。

エラソン 動かないと可能性はない。異文化に触れ合うことは大事。自分の足りないところが見えてきます。

山中 パラグアイにいる時は外からの視点でパラグアイを見ていたし、日本にいる時も外からの視点で日本を見ているような感じがします。日本に来て、自分の中に南米の考え方があつたということを確認しました。

徳家 皆さん、留学当初は様々な苦労や戸惑いがあつたことと思います。それら乗り越えて、それぞれの目標や希望に向かっていろいろな経験を積み、そしてこれからさらに様々なフィールドでご活躍されていくことを楽しみにしています。ありがとうございます。

(2008年10月10日、早稲田大学55号館N棟2階応接室にて)

サッカーインカレ制覇

門田新平(修士1年/中川研究室/苗H20)

「13年ぶりの早稲田大学ア式蹴球部インカレ優勝」といわれても、何のことがよくわからない方もいると思いますが、「ア式蹴球部」とは早稲田大学の体育会サッカー部のことで、早稲田のサッカー部が全日本大学サッカー選手権(インカレ)で優勝したのです。その日本一になる瞬間、決勝のピッチに建築学科生として立っていたのが、私です。

サッカー部員はスタッフを合わせ100人以上になりますが、所属している理工学部生はというと、私が4年生の時には私を含め3人でした。やはり勉強との両立を考えると、理工学部からは参加しにくいようです。特に建築学科はツライと……。



サッカー部は週6日の練習で、1、2年の時は本当に大変な思いをしました。ただでさえ授業数が多く、語学や必修、そして毎週のように出される課題。授業の空き時間に課題をこなしながら、授業が終わると急いでグラウンドのある東伏見に向かい練習に参加していました。それでも練習の半分は遅刻になってしまい、夜9時近くまでグラウンドにいました。用具の片付け、グラウンド整備等を終え、家に着くのは毎日11時を過ぎていました。一人暮らしの家事をすませて、翌日の

1限に備えて早く床につく、という生活をしていました。その頃は建築学科の課題でも良い評価はいただけず、サッカー部でも練習試合にすら出られない日々が続きました。「このまま続けて、自分は大学生活で何をできるのか」と自問し、迷う時もありましたが、好きなことに2つも本気で取り組んでいる環境に感謝しなければならぬと思い、「こうなったら全部やってやるぞ!」とポジティブな気持ちで続けました。3年生になる頃には、課題の取り組み方にも慣れ、サッカー部の活動にも全力で打ち込むことができるようになりました。3年後期には練習試合で結果を残したり、トップチームの練習に呼ばれたりするまでになりました。4年生になると、なんとか大学院入試に合格し、同時に関東大学リーグ、サッカー早慶戦にも出場することができました。そして、最後の大会ではインカレ決勝という大舞台に立ち、優勝メンバーとなることができました。

心が折れてしまいそうにツライ時も続けてきて本当に良かったです。どんな時もサポートしてくれた両親、課題を手伝ってくれた建築学科の仲間、長い時間をともに過ごし、最後の最後で日本一を勝ち取ったサッカー部の仲間、本当に感謝です。

これからの私の展望としては、サッカーとの付き合いは一区切りをつけ、建築学科の大学院生として今までの遅れを取り戻すとともに、研究に勤しみたいと思います。

特集 今どきの学生生活

ぼくらの学生最後の夏

田辺研M2、国際学会Indoor Airに参加
三村良輔(修士2年/田辺研究室/苗H19)



半年以上前のことだが、私の所属する研究室では国際学会に参加するための論文の提出期限があった。私を含めて研究室のメンバーの多くにとって初めての国際学会であり、初めての英語論文の作成を迫られていた。就職活動等も同時並行で進んでいた時期だったが、せっかく初めて欧州に行く機会でもあったので、添削を繰り返し、なんとか論文を書き上げられた。査読が済むと説明資料やポスターの作成に取りかかり、英語でのプレゼンテーションに備えた。

日本を発つまでは辛かったが、その後の学会1週間はそんなことを忘れさせてしまうほどエキサイティングなものになった。仲間とともに少し寄り道をしながら目的地であるコペンハーゲンに着くと、チャーター船が用意されていてオペラハウスで開会セレモニーが始まった。日本の学会では考えられないスタートだが、さらに立食パーティー、オペラやバレエと、学会参加費に対して驚くほど豪華な演出が仕込まれていた。そのような盛大なパーティーは、結婚式程度しか経験がない私にとって、外国人と親睦を深めることが容易にできる場ではなかったが、この際恥を恐れず、拙い英語で多くの人と会話を楽しんだ。

学会はデンマーク工科大学で行われ、学会期間中の午後にはこのようなパーティーや市庁舎見学会、フットボール大会などのイベントがたくさん催された。学会自体は非常にまじめに進行するが、午後になり学会が終了すると、ビールを飲んだり、ショーを見たりとコペンハーゲンを満喫できた。全体を通して優雅な時間を過ごす北欧がそこにはあった。

さすがに毎日ビールを飲んでいては自分の発表ができないので、前日は24部屋のカフェの中で練習をした。集中できるような場所ではないが、物価の高い北欧では仕方ない。練習の成果というわけでもないが、発表はスムーズに説明することができたものの、質問には非常に戸惑った。頭にたたき込めばできることはたくさんあるが、私自身インタラクティブという面では非常に劣っていると感じた。

学会を通し約1カ月の間を海外で過ごすことができた。しかし、私たちがめざさなければならぬことは、国は関係なく、英語を用いて、何かを学び、伝え、議論し、納得させることであると思った。そういった意味で学会への参加は非常に有意義なものになったし、忘れられない経験になった。

終着点であり、再始発点となったトウキョウ建築コレクション

上田真路(苗H17・院H19/鹿島建設)

2007年3月、代官山ヒルサイドテラスにて全国初となる修士学生卒業設計・論文展覧会が産声をあげた。
早稲田大学建築系研究室を同時期に卒業する学生を中心に、古谷誠章先生をコーディネーターに、横文彦先生を顧問にお迎えした同展覧会は、建築各方面の第一線で活躍されている先生方をはじめ、さまざまな団体・企業・出版社に多大なるご支援をいただき、建築各系から集まった作品・論文を通して新たな建築・都市・技術の在り方を導き、発信する深い議論の場が創造された瞬間であった。

同展覧会が私にとって、そして同時期に大学院を卒業する学生にとって一つの集大成となった経緯を紹介すると、事の発端は大学院に入り、大学院各系の有志と共に立ち上げた早稲田建築塾「Waseda Architects Researchers & Council」(通称WARC)の活動である。大学院に進学し各系の理論と実践を深めた結果、その成果や議論を自分だけの系でとめるのではなく、積極的に分野を越えた議論と成果を求めてゆこうという趣旨のもと、WARCは約1年間隔隔にて早稲田大学の学生はもとより他大学、一般の方々とともに大勢の先生方、先輩方にご支援をいただいていた課外授業を行ってきた。その終着点としてトウキョウ建築コレクション運営委員会が設立され、同展覧会開催へと至った。SDレビュー賞(2006年度)を私と共に獲得した神谷修平氏もまた共にWARCの代表をしていたのだが、思えば代官山ヒルサイドテラスにて、今後、建築を世に問う展覧会の始発点をつくることのできたという人の縁と機会、そして結集する世代の煽動力が重なり合う現象を肌で感じ、そして25年前にSDレビューを産んだ先代の凄まじい煽動力を改めて意識し、畏敬の念を抱く機会ともなった。

今年もまた第1回に引き続き、同展覧会が無事開催され、一つの点としてプロットされた。この二つ目、三つ目の「点」が継続され、連続して「線」となり、やがては他の建築系展覧会とも結びつき「面」となり、一つの大きな潮流となっていくように、社会に出た今後も支援してゆくことはわれわれ初代運営委員会の目標でもあり、責任でもあるという再始発点を得るに至った。

修士1年生卒業設計・論文展覧会
(2007・2008)

早稲田建築塾(WARC)



第8回稲門建築ライブラリー公開懇談会特別講演会

「設備家の生き様を知れ。」井上宇市「報告

10月16日(木)、早稲田大学理工学術院55号館N棟大会議室において、第8回稲門建築ライブラリー公開懇談会特別講演会、設備家の生き様を知れ。／井上宇市が開催された。

今回は、設備設計を通して日本の建築界に偉大な業績を残した井上先生についての講演会ということで、先生の教え子であり数々のプロジェクトを共にした7名のゲストにご登壇いただくという、大変贅沢な催しとなった。本学学生のほか、多くの社会人の方々や他大の学生も訪れ、開演前には会場がいっぱいになるという、大盛況の様相となった。

司会は長谷見雄二教授(苗S48・院S50)。本講演を学部2年生の授業の一環とし、多くの学生を動員してくださった。

午後6時、地主道夫事業委員長(苗S48)の挨拶で開演。続けて、長谷見教授から本会の趣旨説明と挨拶をいただき、本編が始まった。

第1部は、主に井上先生の設計事例についての解説。水野宏道氏(苗S34・院S44)より井上先生の経歴、京王百貨店、山口銀行、早稲田大学大久保キャンパスについて、佐藤光男氏(院S39)・中島康孝氏(苗S31)より国立代々木屋内総合競技場について、木内俊明氏(苗S32・院S40)より万博お祭り広場、東京海上ビルについて、佐野武仁氏(院S48・博H9)より膜構造物について、それぞれお話をいただいた。私たちにとって馴染みのある建築を支える設計者たちの試行錯誤には、多くの学生が感じ入った様子であった。

第2部は、研究者・教育者としての側面も交えた井上先生の人柄について語る場となった。まず、古谷誠章教授(苗S53・院S55・博S61)が、両手書きで板書をするなど井上先生の授業での様子について語られた。次に澁谷英嗣氏(苗S33)、水野宏道氏は、先生が作成してきた論文や設計資料の数々に触れ、その業績の偉大さという印象付けた。

魅力的な人物像についての話は尽きることなく、講演は予定終了時刻を超えて9時まで開催された。

時間の関係上、先生へのインタビュ映像は残念ながら省略となったが、開演前の会場で拝見した映像には、研究所の方々と図面を見ながら設計事例を振り返って語られる先生のお姿があった。

最後の質疑応答では、これから将来の道を探っていく学生に対して、ゲスト諸氏から多くのお言葉をいただいた。

今回は、稲門ライブラリーで初めて設備分野を取り上げ、大変実りある企画となった。本企画に関わったすべての方々はこの場を借りてお礼を申し上げますたい。前田花織(学生理事・事業委員/苗H19)

学部2年生の感想レポートより(抜粋)

■建築を学び始めて一年半以上が経とうとしており、名前を聞いてピンとくる建築家は増えてきました。設備、設備家という言葉が聞いただけでは、具体的にどのような仕事かイメージできなかったため、今回の講演会では、井上宇市先生の業

績を通して、建築設備の歴史と役割に触れることができ、設備の分野にとっても興味を持つことができました。

国立代々木屋内総合競技場が丹下健三の設計であることは誰でも知っていますが、その空調の設計を井上宇市先生が手掛けられていることや、それだけでなく当時の最先端の日本建築のほとんどの設備設計に携わっておられる事実を知って、井上先生の手腕の素晴らしさを感じることができました。(坂根知世)

■普段私たちは当たり前のように、快適な室温、湿度の中で暮らしていますが、この環境が出来上がった背景には井上先生のような人々の努力があったのだと知り、感嘆しました。なぜならば、私は戦後の何もない時代が、スライドで見せていただいた写真のように本当に何もなかったのだと想像することができなかったからです。

先生が失敗を通して得た経験の数々を蓄積し、後輩に、建築界に残したことは偉業であると感じました。こうした努力をする人々がいなかったなら、今の私たちの生活はどのようなになっていたのだろうと考えるとぞっとします。井上先生の勢いのある姿勢、根気強さ、人格を見習い、私も何か打ち込める仕事ができるよう、今大学で学んでいることを大切にしていきたいと思っています。(大森葉月)

非常勤講師を去るにあたって

田中義吉(早稲田大学非常勤講師・田中義吉設計事務所/苗S37・院S39)



昭和49年(1974)、当時の学科主任の谷先生から、昭和50年3月に鶴田先生が定年退職されるにあたり、鶴田先生ご担当の授業

を複数の先生で担当するので、構造設備製図と建築材料実験を担当するようご指示がありました。

当時の構造設備製図は、竹内・谷・蛭田・舟橋の各先生が担当されていました。前期から後期の中間までが構造製図で、その後は設備製図へパトントッチしてました。数年後、前期構造、後期設備に分かれました。蛭田先生、舟橋先生が退職され、柳原先生、竹内先生が定年退職されてからは、田中彌壽雄先生が担当されました。

設計課題はRC造とS造に関して、それぞれ2課題の製図を完成するというもので、内容を理解して提出期限内に完成できるよう、課題建物のスライドを使用して事前に説明し、同時に製図の描き方を講義するスタイルとしました。実際の製図はCAD利用となりましたが、鉛筆を用いて構造製図を実際に描きあげることにより、基礎となる知識を会得することを主目的としました。その後、松井・谷・田中(彌)の各先生が定年退職されました後、西谷・曾田・前田・加藤正之、佐々木仁の各先生が、最近では岡本隆之先生が加わっています。

もう一つ担当させていただきました建築材料実験は、松井・田村・神山・嘉納の各先生が担当されていました。木材・鉄鋼・コンクリート素材に関する一般実験と、特別実験としての溶接があり、特別講義には松井先生が著書の『見える力学―力と編』を用いて光弾性の講義をされました。田村先生・神山先生が定年退職された後、興石先生および小松先生が担当されました。平成12年に学部大学院の6年間で一貫した教育カリキュラムとなっており、建築工学実験Aとなり、8項目の基本実験と調合設計に関する講義により構成されています。

私は2科目のお手伝いをさせていただいたお蔭で、諸先生のご指導を賜り、職員の方々・助手・TAと数多い学生さんに接する機会を与えていただいたことに深く感謝いたします。

講演会のお知らせ……………事業委員会

稲門建築会講演会(中村史郎)

日産自動車のデザインの総責任者として、世界中を飛び回り、幅広く活躍されている中村史郎氏の生き様をお話いただきます。ご期待ください。

ゲスト 中村史郎氏(日産自動車株式会社常務執行役員、チーフクリエイティブオフィサー)

日時 12月8日(月) 18:30~20:30
場所 57号館201教室(階段教室)

第9回稲門建築ライブラリー公開懇談会「内井昭蔵」

稲門建築会は、早大出身建築家の図面集「稲門建築ライブラリー」を所蔵しています。本年度冬季、第9回ライブラリー公開懇談会では、内井昭蔵先生を紹介いたします。

今回は初めて会場を学外に移し、内井先生の代表作の一つ世田谷美術館で、見学会および講演会の開催を企画中です。ご期待下さい。

日時 2009年2月上旬を予定
会場 世田谷美術館(予定) ゲスト 未定



2008年早稲田建築

合同クラス会速報

2008年の第32回早稲田建築合同クラス会は、秋晴れの11月1日(土)、大久保キャンパスで開催されました。

合同クラス会の起源を顧みると、「早苗新前期合同クラス会」に始まり、吉村作治先生の講演会の様子
1994年の第18回までは早苗会だけの集まりでしたが、1995年からは稲芽会と稲友会、稲工会、寛会の5部会合同の「早稲田建築合同クラス会」に再編されました。その年の合同クラス会は磯崎新・菊竹清訓・伊藤滋という建築界を代表する建築家によるシンポジウム、牛の丸焼きなどのイベントもあり、参加人員1,300人、会費8,000円という盛大なものでした。

昨年(2006年)はヌードテッサンやマグロの解体ショー、昨年(2007年)は大学創立125周年の節目でもあり、シンポジウム「創造と破壊」、今年は理工学部創設100周年の節目となり、吉村作治サイバー

大学学長の講演「環境と文明」と、エジプトにちなみ本場タンサーによるペリダナスが懇親会会場を盛り上げました。ご神木を引き継いだ1982年学部卒の2008年学年幹事の安東直さんが中心となり、25年ぶりの旧友たちと「何度もち合わせと飲み会を重ねてまとめあげた企画でした。」

また、当日は理工展/テクノフェア早稲田も同時開催され、学生社会人双方のゲートウェイとなる産学交流・連携の場での、学部研究室紹介、企業ブース展示など充実した一日となりました。



吉村作治先生の講演会の様子

吉村作治先生の講演速報 「環境と文明」古代エジプトの 循環型社会の視点から

……エゴロジからエゴロジへ

旧テニスコート跡地に今年オープンした新しい63号館2階大教室での吉村作治先生の講演会は、田辺新一先生の司会により始

まりました。開始早々、吉村先生の幅広い見識と巧みな話術で講演会場は和やかな雰囲気包まれました。

古代エジプト文明史の視点より、自然との共存や循環システム、公共事業まで、本来のエゴロジカルな生活について、吉村先生に大いに語っていただきました。

日々、大量の資材を生産・消費する建築活動の中で環境問題に取り組んでいる私たちにとって、原点に立ち戻って新たなヒントを発見できたことと思います。最後に中川武先生による閉会の挨拶で締めくくられました。

懇親会にて村松映一稲門建築会会長のあいさつ



懇親会会場は同じ63号館の1階の広々とした明るい200名以上のOB学生が参加しました。村松映一稲門建築会会長の開会の挨拶に始まり、講演された吉村先生をはじめ、2007年度芸術院賞、2008年度大隈記念学術褒賞を受賞された鈴木一二先生、2008年日本建築学会賞(業績)を受賞された伊東正示先生の喜びの声を聞いた後、佐藤滋先生の音頭で乾杯し、OB参加者を交えた懐かしく楽しい歓談となりました。最後は菅原副会長の挨拶と校歌の合唱で締めくくりました。

小笠原昌宏(広報委員会)／苗S57/日本設計

稲一門一建一築一会一見一学一会一報一告

●第1回見学会「鹿島赤坂別館」

7月16日に見学会が実施された鹿島赤坂別館は、鹿島建設の本社技術部門が入る新しいオフィスビルです。1階から9階までが鹿島建設の事務所、10階から15階までが住宅になっています。

「フレキシビリティ」「サステナビリティ」「セーフティ」の3つからなる新しいワーキングスタイルを提案しており、人がいる場所だけを照明、空調するエコモジュールの導入や、高性能ガラスによる快適環境と省エネルギーの実践、次世代リアルタイム防災システム「RDMS」の本格活用など、



「鹿島赤坂別館」外観

現代の問題に取り組みながらも将来をしっかりと見据えたオフィスビルディングとなっています。

見学会には50名ほどの参加者が集まり、オフィスはもちろん、住宅エリアやカフェテリアなど別館の多彩な機能を見学することができました。たくさん人の学生が参加者が見受けられ、この建築に対する関心の高さが窺えました。

山口大地(学生理事・事業委員会) 修士1年/苗H20

プレゼンテーションの様子



●第2回見学会「神保町シアタービル」

9月8日、残暑の中、見学会に約50人が参加した。神保町シアタービルは小学館運営の映画館(100席)と吉本興業の稽古場および寄席(126席)から成り、亀裂の入った異形の多面体は不思議に周囲に馴染んでいた。

若手芸人は昼夜問わずに練習ということで、吉本部分は残念ながら見学ができなかったが、開館前の映画館で設計を担当した日建設計の羽鳥達也氏より説明を受けた。

神保町は古書街として有名だが、戦前まで映画館や寄席など芝居小屋の街でもあった。同館は建て

桜井譲爾先生の思い出



桜井譲爾早稲田大学名誉教授(苗S32・院S34・博S39)が、本年6月4日、ご逝去されました。

桜井先生は、早稲田大学のコンピュータ構築・運営および利用の先駆者でした。また、日本建築学会や日本建築センターで、電算部門の委員会の要職を歴任されました。名誉教授になられた後も、専門学校の教育、研究などいろいろご指導をいただきました。早稲田大学産業界技術専門学校から早稲田大学専門学校に変わった時は、大変なご苦労だったとうかがっています。

専門学校の行事には、建築を見学し親睦を深めるバスハイイクや、追分での合宿ゼミがあります。先生には、いつも参加していただき、真夜中、豪雨のなか、パンガローの見回り、追分から旧軽井沢までの4時間にわたるサイクリングゼミ、思い出がつきません。

こよなく奥様を愛され、いつも煙草を燻らせ、ここにこされて、穏やかな笑顔が印象的でした。大好きなクラシック音楽にかこまれたご葬儀でした。ご冥福をお祈りします。

伊沢 久早稲田大学教授/苗S45・院S47・博H3



右：亀裂の入った表皮に覆われた神保町シアター外観
上：映画館で建物の説明を受ける

主である小学館社長の芝居小屋を軸にした街づくりビジョンと、テナント吉本興業の神田花月亭(大正11年建設)再興への熱い思いの結実である。

小さな敷地に天空率

制度を活用して最大容積を確保。その結果もたらされた多面体の躯体を外装と耐震要素を兼ねる耐候性鋼板パネルで覆い、外断熱としている。外壁の亀裂は熱伸びのバッファと雨樋を兼ね、外断熱の効果を高める簡素な自動通気装置も設置。大きな亀裂は窓になっている。外装は、芝居小屋やガード下稽古場の熱気を表現したいと、船舶用塗料をあえて荒削りに仕上げたこと。それに対して平面は片側コアで高効率・機能的。非常に制御の効いた設計である。

ホールでの懐かしい映画の上映は、古書店で初版本を探すというオタク的ファンに支えられてずいぶん賑わっているという。この日も見学の終わりに開館待ちの列を見た。

山崎隆盛(理事・事業委員会)／苗S56/日建設計

9月24日の夜、「2008年度第2回稲門建築会理事會」に続き、2008年度第1回稲門建築会職域幹事會が55号館1階大会議室で開催されました。会長、副会長、その他理事の出席のもと、各職域から44名の職域幹事が集まりました。



第1回職域幹事會報告

その後は職域幹事會のメインイベントとして各職域幹事一人一人に会費納入率の目標を発表してもらいましたが、概ね昨年の10%増以上の目標という司會者の強引な要求に初めて参加した職域幹事からは「このような会だとは知らなかった」との発言もあり、会場の笑いを誘っていました。

初めに村松会長の挨拶があり、職域幹事に對し、来年度建築学科創設100周年を迎えるこの時期に職域が78から86へ増加し、その役割はさらに重要となり、会費納入人口の維持・拡大に尽力し稲門建築会活性化の一翼を担ってほしい、との期待が述べられました。各委員長からの委員會活動報告の後、委員會長の髙委員長より稲門建築會規約と職域幹事規定の説明があり、本會が委員の會費で運営されていること、現在86職域で約2,700名の連絡可能委員がいること、全体では約11,000名の大組織であること、等が話されました。

今回は職域幹事への委嘱状も用意され、村松会長から職域幹事の代表に委嘱状が手渡されました。

職域幹事會の後、副会長の佐藤先生の乾杯で懇親會が始まりました。お酒と料理が豊富に用意され、皆さんがグラスを傾けつつ、あちらこちらで会話が花が咲き、会場は大いに盛り上がりました。途中、安東合同クラス會実行委員長から11月1日に開催される合同クラス會のお話や、會費納入率の高い職域幹事からの目標達成の秘訣の披露等もあり、楽しいひと時を過ごしました。最後に全員で肩を組んで「都の西北」を合唱し、髙委員長の締めめの挨拶で、9時過ぎにお開きとなりました。

以下に本年、會費納入率が平均以上の職域と、職域幹事の皆さまのお名前をご紹介します。

● 會費納入上位職域リスト (2008年10月31日現在)

職域名	納入率
1 工学院大学	80.0%
2 芝浦工業大学	71.4%
3 三機工業(株)	60.0%
4 東京建物(株)	58.3%
5 早稲田大学	58.0%
6 山下設計	56.4%
7 (株)安井建築設計事務所	55.6%
8 (株)梓設計	50.0%
8 (株)新建築社	50.0%
8 鉄建建設(株)	50.0%
8 日本環境技研(株)	50.0%
12 大成建設(株)	43.8%
13 森トラスト(株)	42.9%
14 (株)鏡光企画設計社	40.0%
14 (株)都市デザイン	40.0%
14 (株)日建設計	39.8%
17 安藤建設(株)	37.5%
17 国士館大学	37.5%
17 (株)松田平田設計	37.5%
20 (株)NTTファシリティアーズ	37.1%
21 野村不動産(株)	35.3%
22 東海大学	33.3%
22 飛鳥建設(株)	33.3%
22 りんかい日産建設(株)	33.3%
25 森ビル(株)	32.0%
26 清水建設(株)	31.9%
27 東京電力(株)	30.3%
27 前田建設工業(株)	30.3%
29 佐藤工業(株)	30.0%
29 (株)佐藤総合計画	30.0%
31 (株)アール・アイ・エー	28.6%
31 (株)東急設計コンサルタント	28.6%
31 (株)日建ハウジングシステム	28.6%
31 東日本旅客鉄道(株)	28.6%
35 (株)三菱地所設計	27.6%
36 東京急行電鉄(株)	27.3%
37 戸田建設(株)	27.0%
38 三井不動産グループ	26.7%
39 (株)久米設計	25.9%
40 東京ガス(株)	25.8%

永澤 明(苗H4)／(株)アール・アイ・エー	内藤 純(苗S60)／(株)電通
梶山 徹(苗H7)／(株)浅沼組	中野淳太(苗H9)／東海大学
菅澤光裕(苗S53)／旭化成ホームズ(株)	加藤千博(苗S58)／東急建設(株)
永池雅人(苗S56)／(株)梓設計	南海幸男(苗S54)／(株)東急設計コンサルタント
川上 清(苗S42)／安藤建設(株)	松尾隆広(苗S59)／東急不動産(株)
木村 誠(苗S49)／(株)石本建築事務所	山本洋史(苗S61)／東京ガス(株)
宇塚幸生(苗S50)／(株)入江三宅設計事務所	浅野 新(苗S61)／東京急行電鉄(株)
伊藤喜文(苗S54)／(株)NTTファシリティアーズ	鈴木康史(苗S59)／東京建物(株)
岡本利之(苗H3)／大阪ガス(株)	町田兎治(苗H3)／東京電力(株)
柴田淳一郎(苗S56)／(株)大林組	本橋啓一(苗S57)／東電設計(株)
橋本 浩(苗S56)／(株)奥村組	山田孝司(苗S57)／(株)都市デザイン
松崎公一(苗S51)／鹿島建設(株)	前川一郎(苗S55)／戸田建設(株)
鈴木 裕(苗S48)／(株)鏡光企画設計社	小池研司(苗S53)／飛鳥建設(株)
中島正夫(苗S53)／関東学院大学	下村 宏(苗S59)／西松建設(株)
薄 義明(苗S53)／北野建設(株)	神田篤志(苗H15)／(株)日建設計
北神祐之(苗S55)／(株)熊谷組	石田直史(苗S62)／(株)日建ハウジングシステム
阿部宏志(苗S56)／(株)久米設計	福島朝彦(苗S58)／日本環境技研(株)
中島裕輔(苗H7)／工学院大学	宮崎正俊(苗H2)／(株)日本設計
阿部誠允(苗S43)／(株)構造計画研究所	斉藤 忍(苗S60)／(株)乃村工務社
鳥海俊行(苗S53)／(株)鴻池組	石堀良一(苗S57)／野村不動産(株)
原 英嗣(苗H9)／国士館大学	末広英之(苗H9)／(株)博報堂
山崎直宏(苗S53)／古久根建設(株)	中澤 徹(苗S55)／(株)間組
木下修文(苗H12)／(株)コスモスイニシア	小島康太郎(院H6)／パシフィックコンサルタンツ(株)
岡本光正(苗H5)／五洋建設(株)	星 龍登(苗H7)／東日本旅客鉄道(株)
川井康平(苗H14)／ザイマックスグループ	岡田 高(苗S52)／(株)フジタ
今春大介(院H10)／(株)坂倉建築研究所	鈴木章夫(苗S58)／前田建設工業(株)
駒田 修(苗S54)／佐藤工業(株)	武田 勤(苗S57)／(株)松田平田設計
関野宏行(苗S55)／(株)佐藤総合計画	勇上直幹(苗H15)／ミサワホーム(株)
清水和彦(苗S53)／三機工業(株)	斉藤 隆(苗S47)／三井住友建設(株)
秋山嘉彦(苗H4)／JFEグループ	成松由希子(苗H13)／三井不動産
村上公哉(苗S60)／芝浦工業大学	田代誠一(苗S53)／三井ホーム(株)
竹内雅彦(苗S59)／清水建設(株)	遊佐謙太郎(苗S54)／三菱地所(株)
大森晃彦(苗S53)／(株)新建築社	渡邊顕彦(苗S57)／(株)三菱地所設計
山田武仁(苗S56)／住友不動産(株)	大竹 宏(苗H14)／三菱商事(株)
小張尚孝(苗S51)／西武建設(株)	大友 理(苗H5)／(株)三菱総合研究所
深谷康壽(苗S53)／積水ハウス(株)	濱本卓司(苗S50)／武蔵工業大学
大関美樹雄(苗S54)／(株)銭高組	玉置健治(苗H9)／森トラスト(株)
松本哲弥(苗S61)／大成建設(株)	田中敏行(苗S59)／森ビル(株)
伴野正幸(苗H12)／大和ハウス工業(株)	松野 淳(苗S55)／(株)安井建築設計事務所
落合弘文(苗S50)／高砂熱学工業(株)	近藤豊史(苗S47)／(株)山下設計
堀口讓司(苗S56)／(株)竹中工務店	浜野四郎(苗S52)／横浜市役所
高橋英治(苗S60)／千代田化工建設(株)	下川裕一(苗S51)／りんかい日産建設(株)
椎名明良(苗S54)／鉄建建設(株)	田邊新一(苗S57)／早稲田大学

● 主な会務の報告

2008年7月以降の主な会務を報告します

● 会議

- 第2回理事會：9月24日
- 第1回職域幹事會・懇親會：9月24日

● 活動

- メールマガジンの発行：7、8、9、10月号
- 第1回見学会：「鹿島赤坂別館」：7月16日
- 第2回見学会：「神保町シアタービル」：9月8日
- 第2回設計製図公開講座會支援：9月27日
- 稲門建築セミナー「熱湯夜話第13夜「環境と」なる、ひとつとながら、住まいづくり」：10月6日
- 稲門建築セミナー「ライブラリー公開懇談會「設備家の生き様を知れ。／井上宇市」：10月16日
- 秋の大会「早稲田建築合同クラス會」：11月1日
- 理工展(建築展、芸術展)：11月1日～3日

● 事務局便り

今回は、稲門建築會が創設された翌年の昭和27年(1952)8月に発行され、早稲田建築二ニュースの前身である『稲門建築會々誌』1号、内藤多伸先生の巻頭言「稲門建築會々報」の発行に當つての一部を再録(一部省略)して、稲門建築會創設当時の雰囲気をお伝えしたい。

「戦争から終戦と同じ稲門を出入り互の消息も分らず、親睦も、協力も、利便も之を計る道はなかつた。学制は変化して大学は新制第1、第2の学部が出来、専門学校、高等工学校は解消し、工手学校は新制の工業高等専門学校として発足した。それ故早苗も舊會も稲工も稲友会も更新しなればならぬ。茲に大同団結して稲門建築會として発足した次第である。やがてその名簿が出来れば大早稲田の建築出身者はこれで連繋がとれ一大家族の様になる次第である。(中略) それで時々會報の様なものを出してお互の心のつながりを得たならば愉快なことであると思う。各地方部會の諸君も心づけて消息を寄せられたいことを希望します。(後略)」

熱い思いで発足した様子が汲み取れる。初心は大事に受け継いで行きたい。 大木紀通(事務局局長／苗S42)

● 事務局冬休み・2009年1月7日

● 編集後記

異なる環境の中に身をおきながら、日々研鑽を積み重ねている留学生の皆さんの、流暢な日本語から溢れ出る熱意と真摯な姿勢に、頼もしさや期待を感じると共に、多種多様な個性や文化の接点として、稲門が果たすべき役割の大きさや更なる可能性を感じました。かつて異国の地にあって、照らし出されたのは紛れもない自分自身そのものであったことがますます甦り、気持ち新たにしたいので、キャンパスを後にしました。

(徳家統／瓜報委員／苗H1・院H5／鹿島建設)